

古代集落と官衙―川津一ノ又遺跡の検討から―

長井博志

1. はじめに

川津一ノ又遺跡は古代の集落跡などが検出されている遺跡であり、坂出市川津町（古代の鞆足郡川津郷）に所在する。これまで四国横断自動車の建設や大東川の河川改修事業に伴い、発掘調査が行われ、報告書⁽¹⁾も刊行されている。

筆者は以前、本遺跡のⅣ区で検出された9世紀前半の官衙的な建物群について検討し、郡衙より序列が低い補完的な官衙であると考えた⁽²⁾。だが、旧稿ではこの官衙の具体的な性格と機能および一般集落であった本遺跡がこのように変化した背景について言及できなかった。

これらは地域における本遺跡の位置づけと深く関わる問題である。よって、以下では川津一ノ又遺跡で確認された古代集落の様相を検討した上で、川津郷や鞆足郡において本遺跡が果たした役割を論じ、これらの課題を考察する。

2. 古代集落の変遷

本節では川津一ノ又遺跡において検出された古代の一般集落が官衙へ変化した背景を考察する前段として、集落の変遷を検討する。時期区分については集落の中核部分が発掘調査されたⅣ区の報告に準じ、他の調査区の報告にも適用した。また、遺構の所属時期についても各報告書の所見に倣った。ただ、一部の遺構の所属時期や性格については私見に基づき変更した。

以下、各調査区で検出された居住遺構を中心として遺構の変遷を述べるが、遺構分布を面的に捉えられるⅢ・Ⅳ区の状況を中心に説明する。

古代①（7世紀前葉）

弥生時代終末期に廃絶していた集落が再び形成される時期である。Ⅲ区（北）・Ⅳ区では両調査区の境界付近に掘立柱建物跡6棟、竪穴住居跡1棟が、改修区調査区では掘立柱建物跡4棟、竈付の竪穴住居跡1棟が分布する。

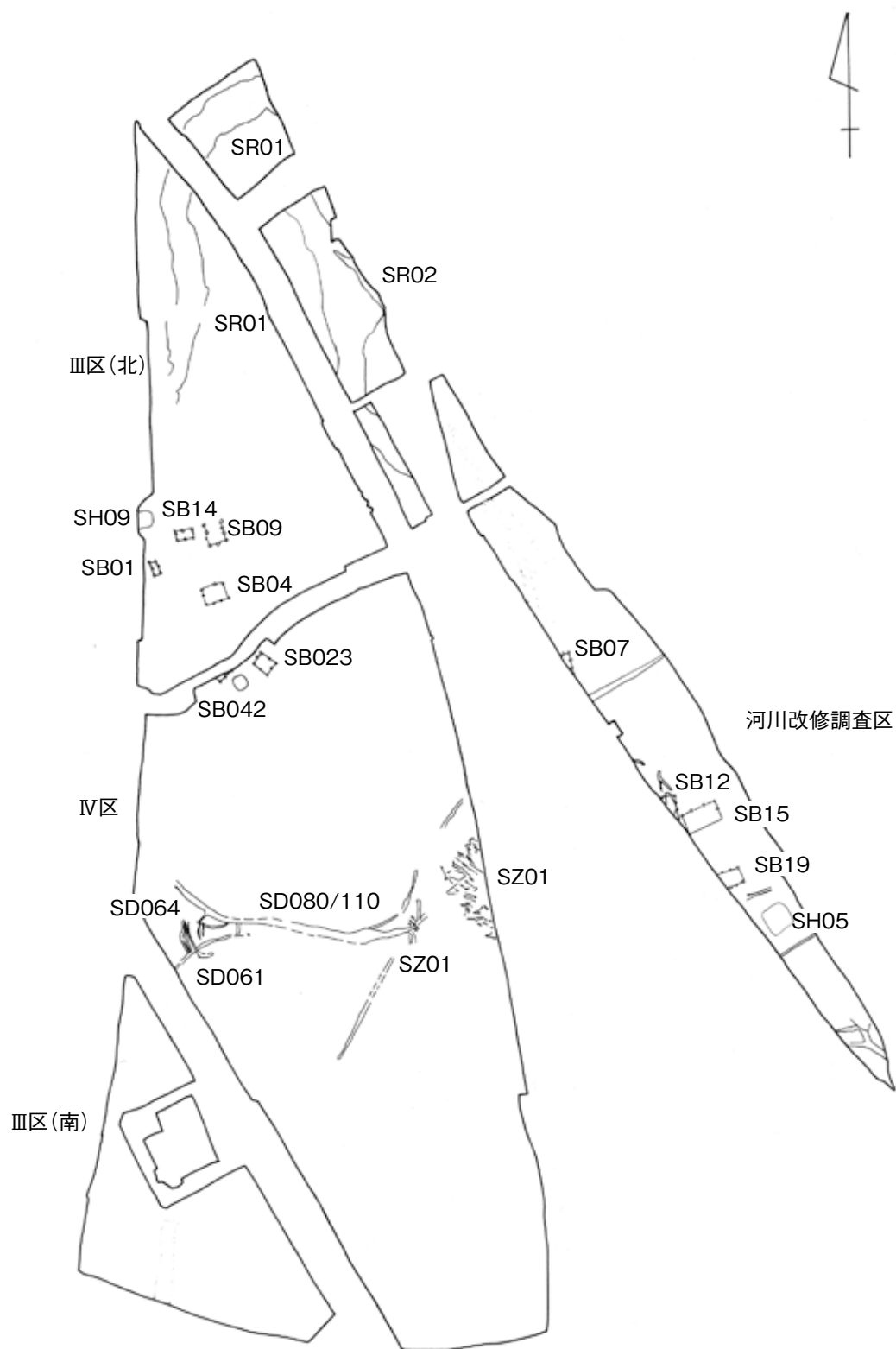
Ⅲ区（北）・Ⅳ区の建物群は2つの建物小群に分かれ、3棟程度の小型建物⁽³⁾で構成される（最大規模のⅢ区SB04でも20.1㎡）。倉庫と考えられる総柱建物跡は含まず、建物配置にも企画性は見られない。

また、Ⅳ区中央部には溝状遺構（Ⅳ区SD080/110）と畑状遺構（Ⅳ区SZ01・SD061・SD064など）が存在する。畑状遺構は一定間隔を空けて並ぶ小溝群であり、平面形状や集落域と区分された配置などからこのように推定されている。

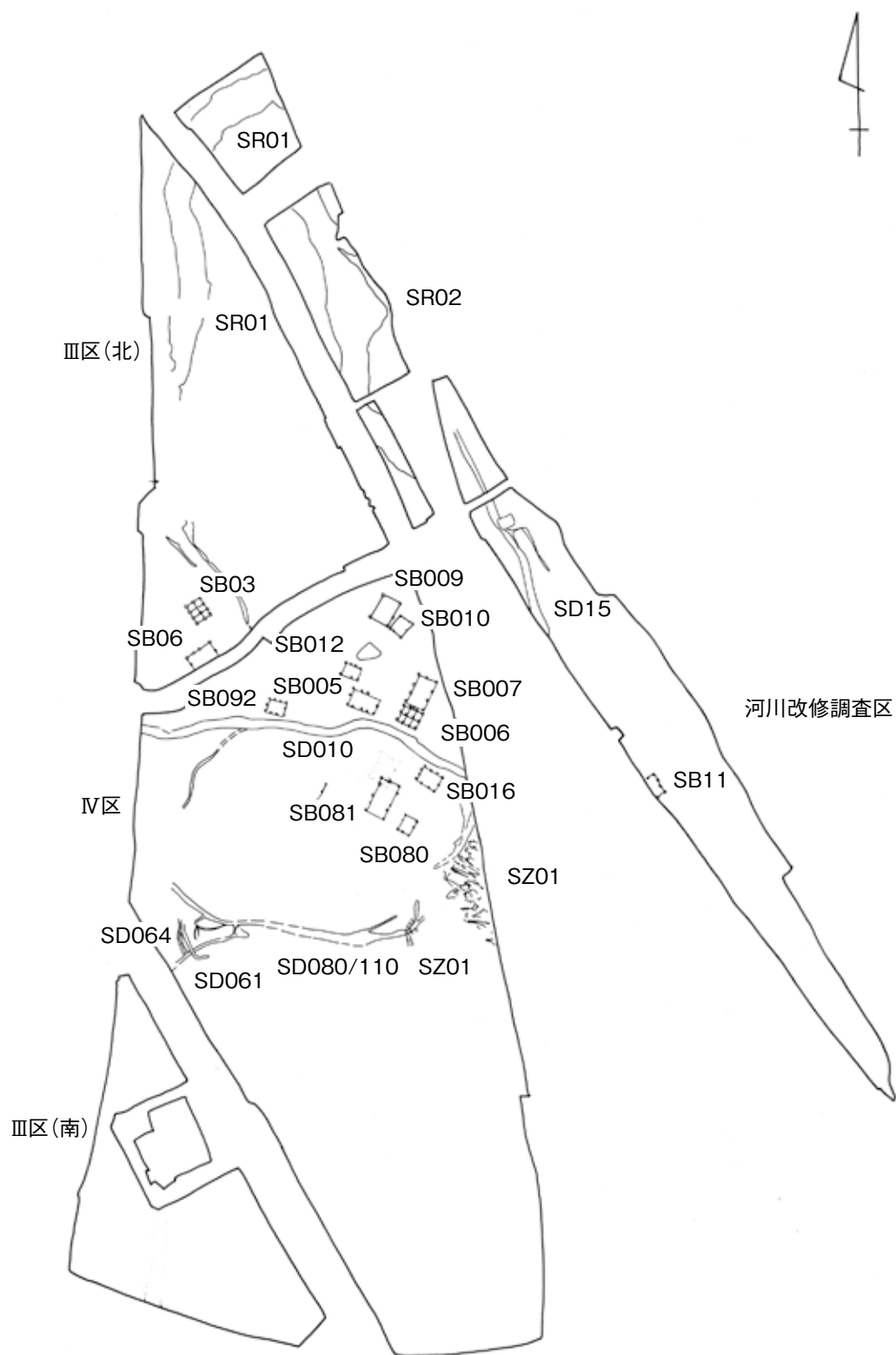
古代②（7世紀中葉）

古代①に継続して、Ⅲ区（北）・Ⅳ区では両調査区の境界付近に掘立柱建物跡12棟が、改修区調査区では掘立柱建物跡1棟が分布する。

Ⅲ区（北）・Ⅳ区の建物群は新たに掘削された溝状遺構（Ⅳ区SD010）の南北に、これと主軸方向を揃えて分布し、4つの建物小群に分かれる。各群は中・小型建物3棟で概ね構成され、前代よりやや大型化する。総柱建物跡は2棟（Ⅲ区SB03・Ⅳ区SB006）があるが、建物配置にも企画性は見られない。



第1図 集落の変遷（古代① 7世紀前葉）（S=1/1500）



第2図 集落の変遷（古代② 7世紀中葉）（S=1/1500）

Ⅳ区 SD010は幅・深度より基幹水路であり、改修区調査区 SD15とつながると見られる。これらの水路は短期間で埋め戻され、次期の古代③には存続しない。また、埋戻しに際して多量の完形の土師器、須恵器が解体痕のある牛や馬の骨とともに捨てられていた。

これらの動向は農業インフラという遺構の性格上、川津一ノ又遺跡以外の集落も関与したと見られる点で注意を要する。

古代③（7世紀後葉）

古代②に引き続き、Ⅲ区（北）・Ⅳ区では両調査区の境界付近に掘立柱建物跡15棟、竪穴住居跡2棟が、改修区調査区では掘立柱建物跡3棟が分布する。

建物小群はⅣ区において不明瞭である。建物群は概ね小型建物で構成されるが、最大規模のⅣ区 SB138は43.0㎡を測る大型建物である。総柱建物跡は2棟（Ⅳ区 SB003・SB087）分布する。ただ、これらの配置に企画性は見られない。

また、Ⅳ区ではこの時期に「大畦畔」（以下、「堤塘状遺構」と記載⁽⁵⁾）の構築、導水するための木樋の設置、これに接続する基幹水路（Ⅳ区 SD040/060）の掘削が行われる。

この堤塘状遺構はⅣ区以外の調査区でも、やや時期差があるものの検出されている。そしてこれを伴うため池はⅢ区（南）で8世紀代の水田跡に導水されていることから灌漑用水源であり、各調査区で一連のものであれば約3haの規模を有したとされる。また、古代②で掘削されたⅣ区 SD010・改修区調査区 SD15が短期間で埋め戻されたのは、ため池構築とこれに伴う基幹水路の変更が背景にあったと見られる。

なお、水田状遺構（SX01。畦畔は検出されず。）が改修区調査区で形成され、10世紀代まで存続する。

古代④（8世紀前葉）

居住遺構の分布が概ねⅣ区に限定される時期である。Ⅳ区では掘立柱建物跡6棟、竪穴住居跡1棟が、改修区調査区で竪穴住居跡1棟が分布する。

Ⅳ区の建物小群は1つで、概ね小型建物で構成される（ただ、最大規模のⅣ区 SB020は55.5㎡を測る大型建物）。総柱建物跡も1棟（Ⅳ区 SB106）のみであるが、ある程度企画性を持った配置を採ることが前代までとの大きな相違点である。具体的には東側に位置する SB017・SB019・SB028の3棟が南梁間の、SB019・SB020が東西桁行の柱筋を揃える。また西側に位置する SB035・SB106も東桁行の柱筋を揃える。

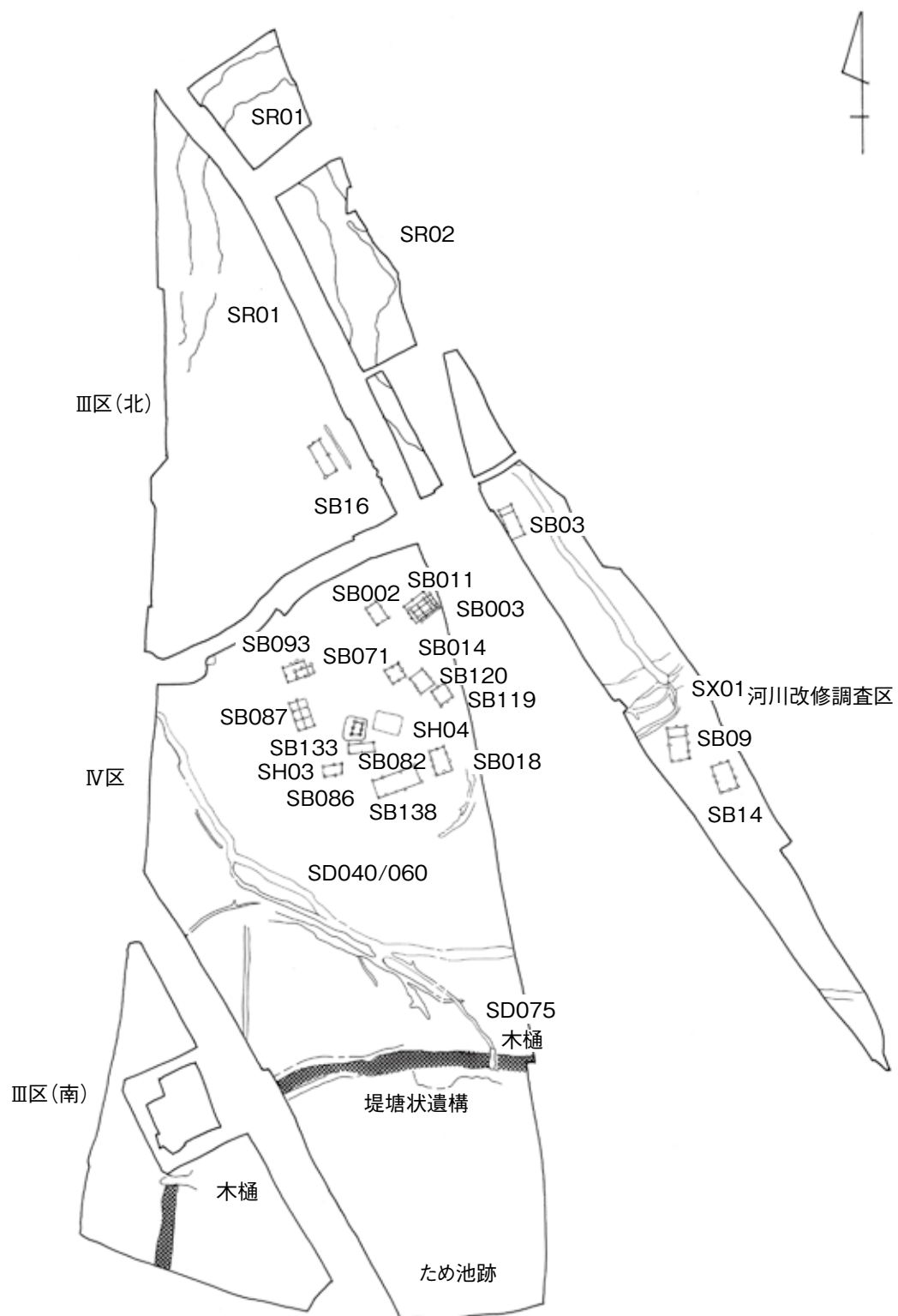
また、Ⅳ区ではため池に接続する基幹水路（Ⅳ区 SD040/060など）がこの時期に埋没する。一方、Ⅲ区は先述のⅢ区（南）の他、Ⅲ区（北）も川跡（SR01・SR02）が埋没し、大部分が水田化される。

古代⑤（8世紀中葉）

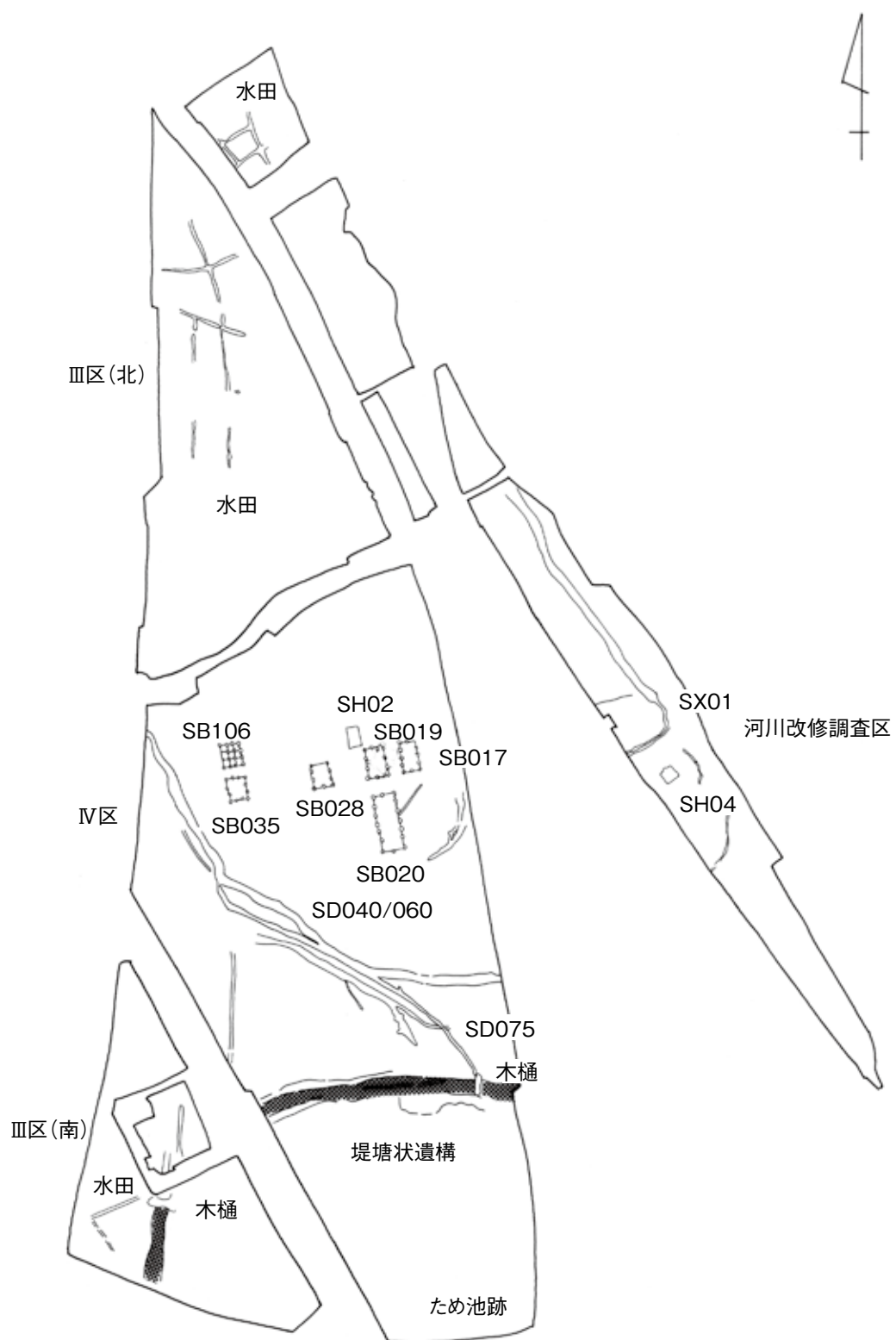
居住遺構の分布がⅣ区に限定され、以後古代⑧（9世紀後半～10世紀前半）まで他の調査区では見られない。

Ⅳ区の建物小群は1つで、小型建物10棟からなる。建物の重複を考慮すると最大8棟が同時併存し、うち3棟が総柱建物跡である。また、ある程度企画性を持った配置を採る。具体的には SB026・SB030が南桁行の、SB030・SB031が東側の柱筋を揃える。また、SB034・SB038は東西桁行の柱筋を揃えて直列する。

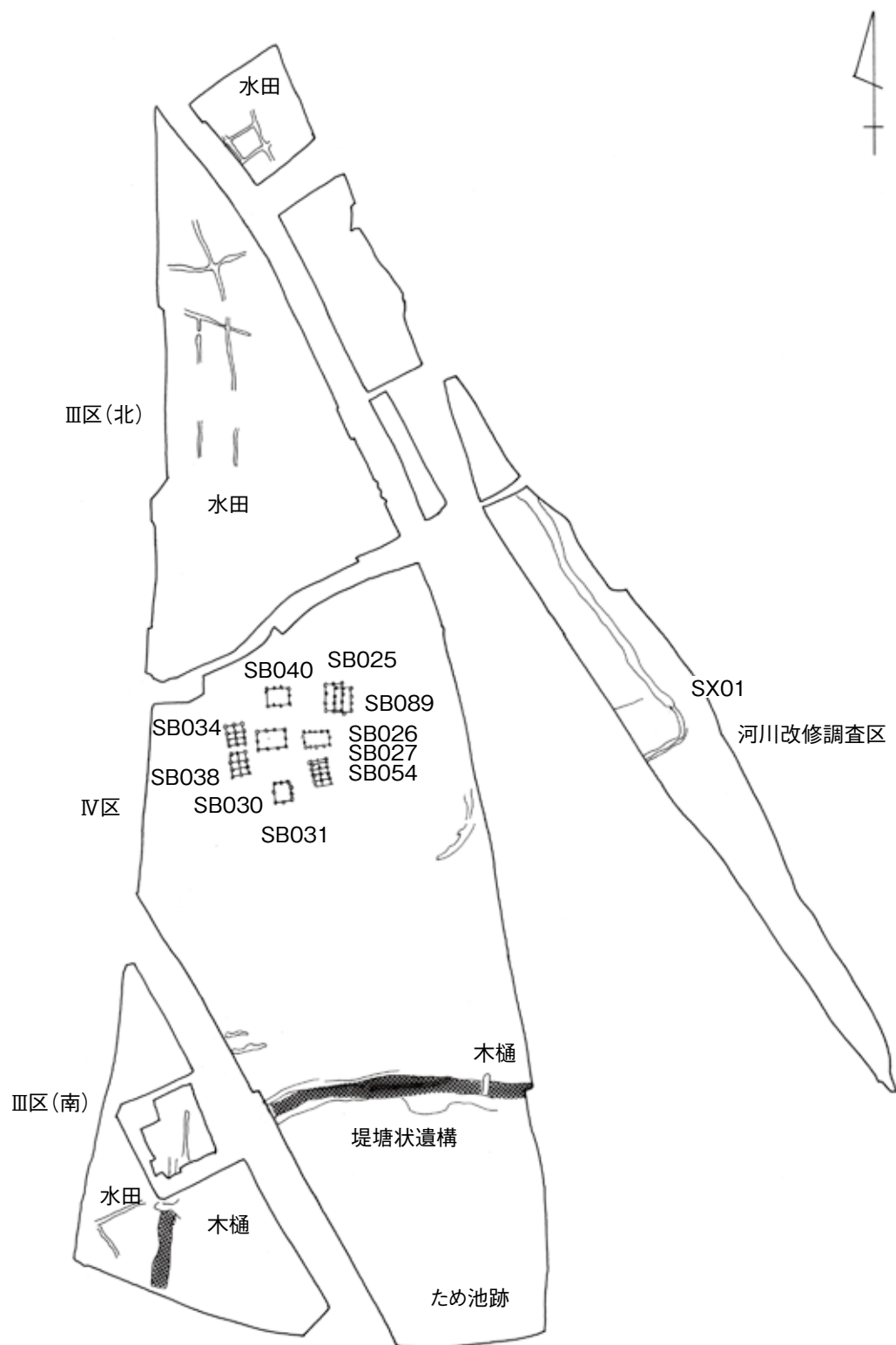
このように前代と比べて、建物小群における倉庫数が増加し、企画的な配置も継続される。



第3図 集落の変遷（古代③ 7世紀後葉）（S=1/1500）



第4図 集落の変遷（古代④ 8世紀前葉）（S=1/1500）



第5図 集落の変遷（古代⑤ 8世紀中葉）（S=1/1500）

古代⑥（8世紀後葉）

Ⅳ区の掘立柱建物跡は9棟が分布し、2つの建物小群を構成する。どちらも中型建物を各1棟含む。

北側の建物小群は4棟で構成され、ある程度企画性を持った配置を採る。具体的にはSB032・SB033が東桁行の、SB032・SB055が梁間の柱筋を揃える。また、このうち2棟が総柱建物跡である。

このように北側の建物小群は企画的な配置を採り、複数の倉庫を持つという前代の特徴を継続し、中心的な建物がやや大型化する。

古代⑦（9世紀前半）

Ⅳ区で18棟の掘立柱建物跡が分布し、西側で官衙が形成される。詳細は後述するが、同時併存しうる建物群は最大9棟である。その特徴は

- ① 全体的な建物配置が「口」字状を呈し、左右対称を意識している。
- ② 建物群は「コ」字形に並ぶ大型建物群と直列配置される倉庫群などにより構成される。
- ③ 区画施設は伴わない。

これらの諸点は前代までの建物群と比較して、配置・規模・倉庫数などにおいて整備・拡大されたものと評価できる。

なお、SB072・SB079・SB101は「L」字状に並び、相互に柱筋を揃えるため、同時併存したと考えられる。また、この建物群は官衙構成建物と重複・近接するため、やや時期差があると見られる。

他の調査区でこの時期に属する主要な遺構として、ため池に伴う堤塘状遺構と改修区調査区の水田状遺構（SX01）がある。

古代⑧（9世紀後半～10世紀前半）

Ⅳ区の掘立柱建物跡は43棟を数え、Ⅲ区（北）でも3棟が分布する。このように多数が分布するのは前代までの年代設定よりも長い約100年間の時期幅を持つことによる。この建物群は報告書で指摘されているとおり、主軸方向と重複状況から少なくとも3期に細分できると考えられる。ただ、Ⅳ区中央に密集する建物群は主軸方向が類似し、詳細な時期決定が可能な出土遺物も乏しいため、同時期建物群を抽出するのは困難である。このため一括して提示した。

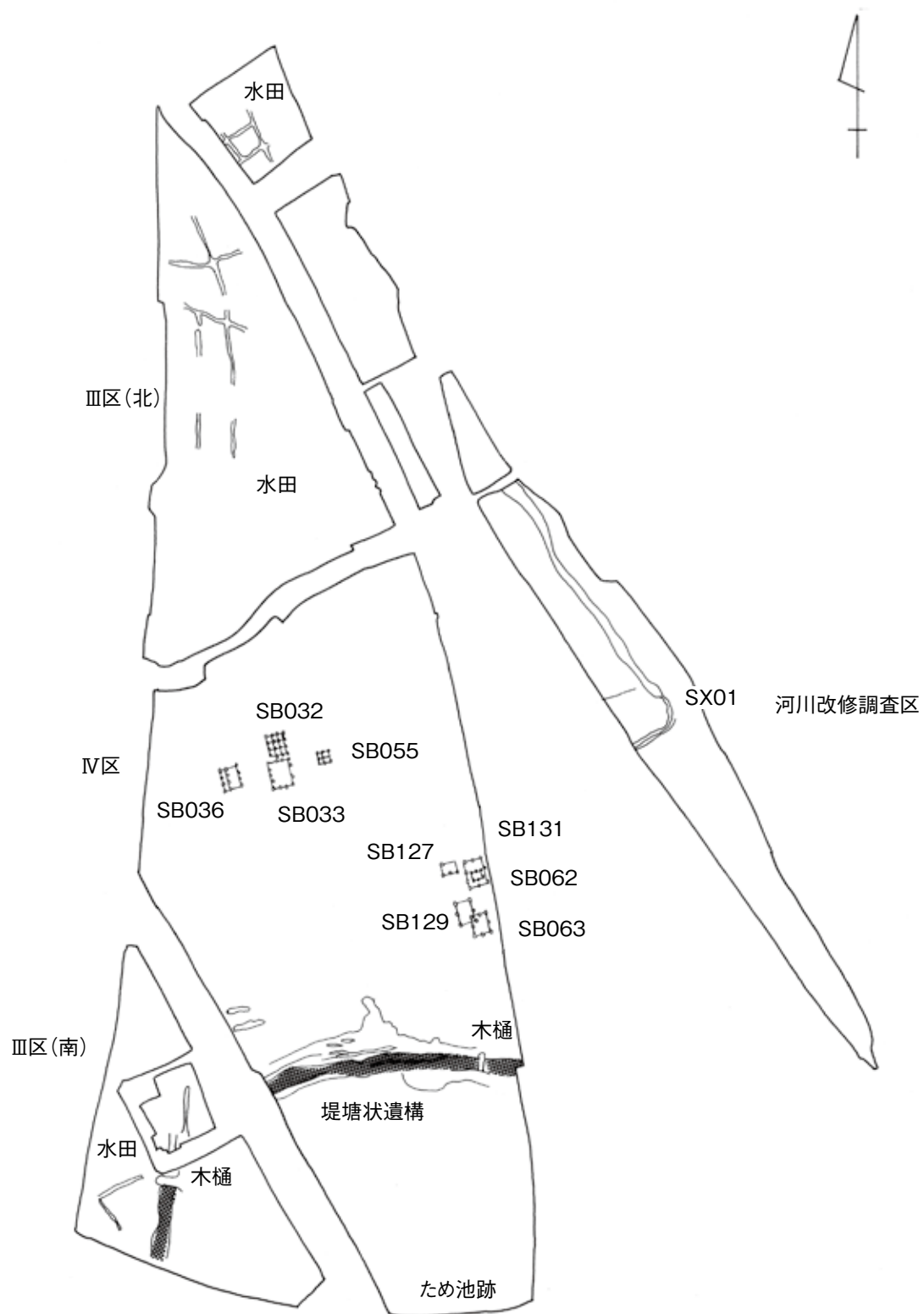
この密集建物群は重複を考慮すると、同時併存しえたのは15棟程度であると考えられる。これらには前代のような官衙的配置は見られないが、注目されるのは直列配置された3棟の建物跡（SB064・SB065・SB068）である。この3棟は建物の中心軸を一致させる。また、2棟の総柱建物跡（SB064・SB065）は桁行の3列の柱筋を揃える。このように企画性を持った建物配置も一部で認められる。

以上の集落変遷を整理すると、次の4段階に区分できる。

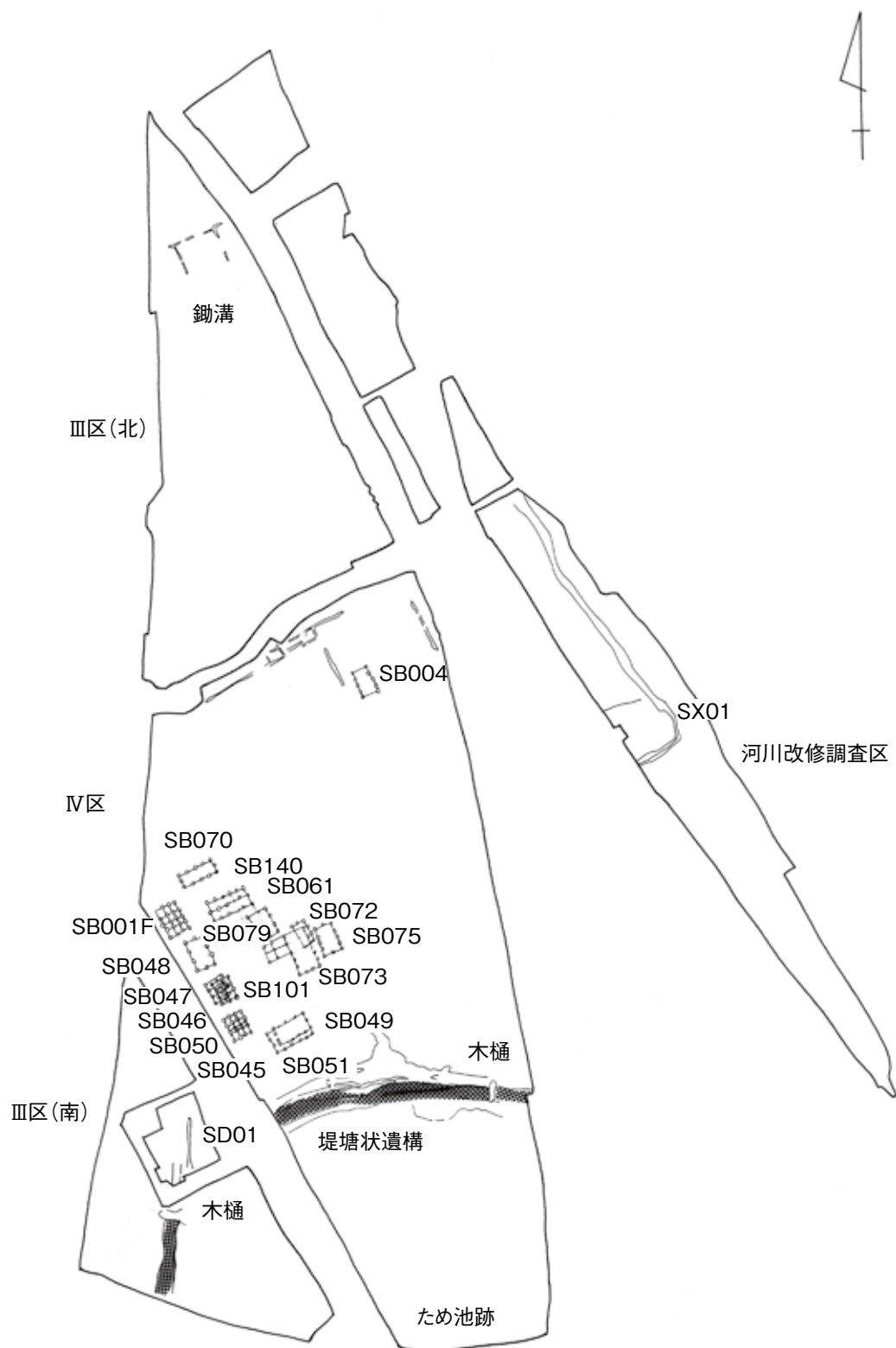
I 期（①～③期 7世紀代） 一般集落期

建物数と中心的な建物の規模が時期を追って増加・拡大する。ただ、建物小群に伴う倉庫は最大1棟と限定的であり、企画性をもつ建物配置は見られない。

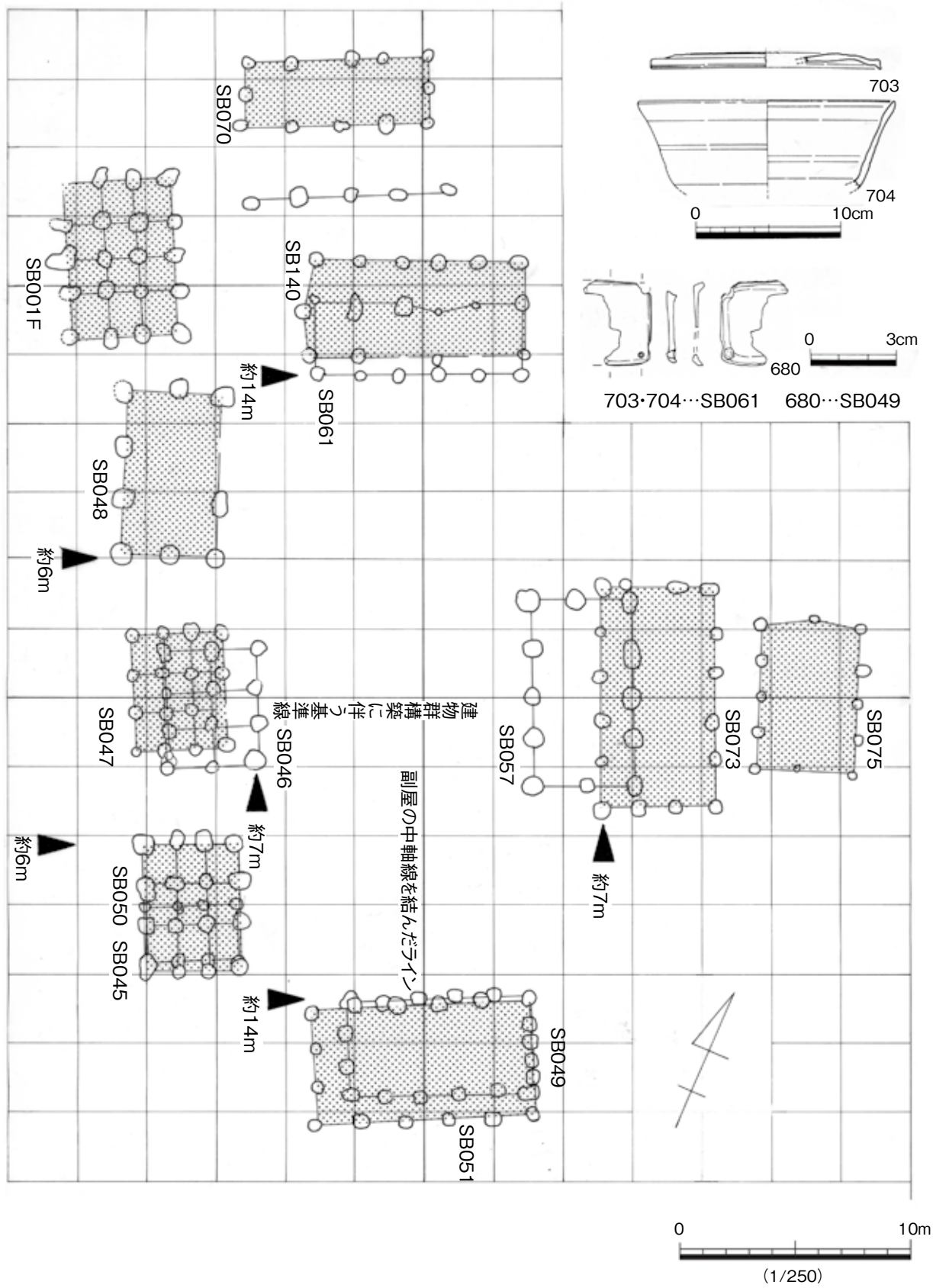
農業生産関連遺構では水田や畑が集落付近に形成される。また、ため池構築やこれに伴う基幹水路の改廃が行われる。なお、旧水路の埋戻しに際しては牛や馬の骨が投棄されているが、これらは耕作に利用されたと考えられる。



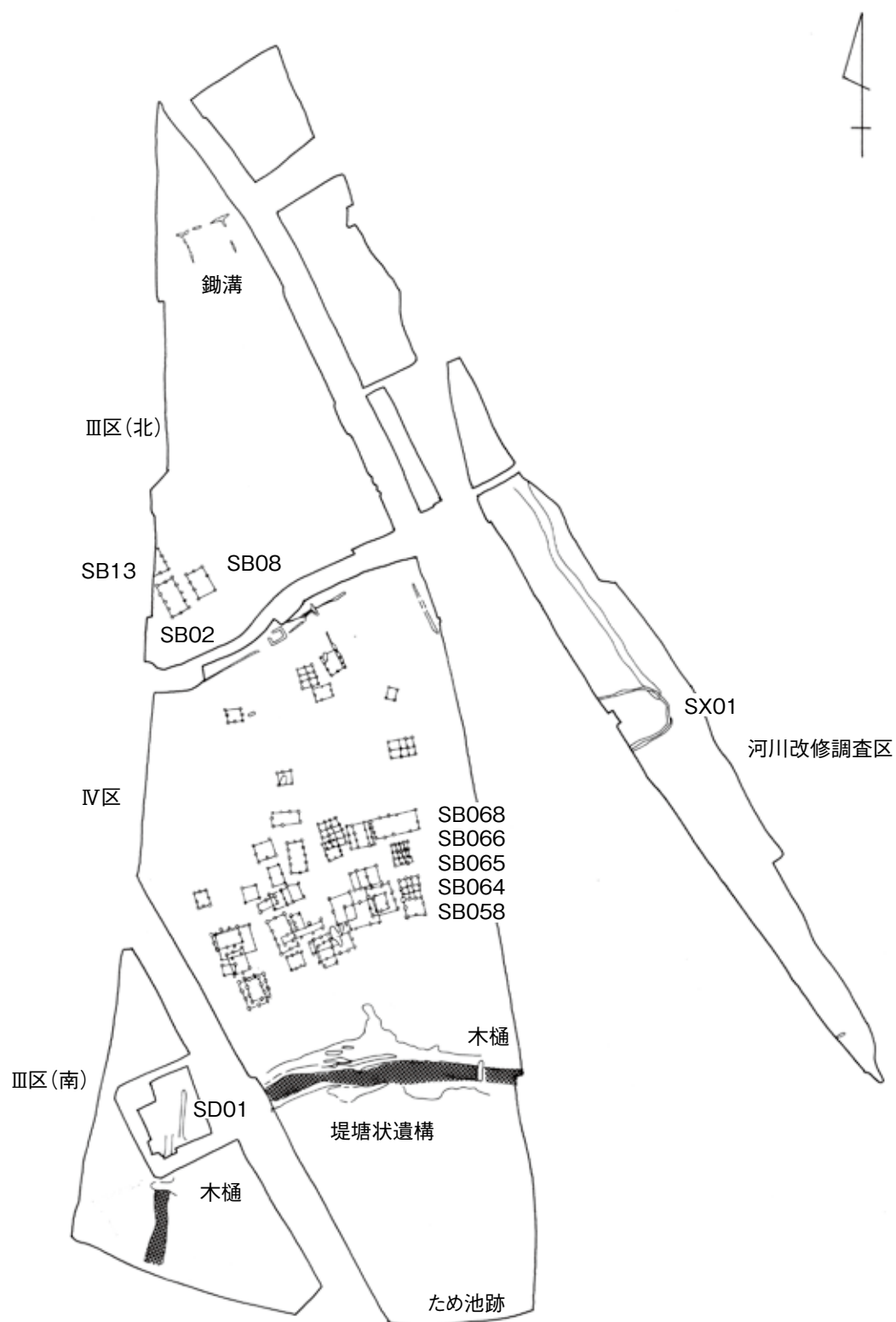
第6図 集落の変遷（古代⑥ 8世紀後葉）（S=1/1500）



第7図 集落の変遷（古代⑦ 9世紀前半）（S=1/1500）



第8図 川津一ノ又遺跡の官衙 (S=1/250 10尺メッシュ)



第9図 集落の変遷（古代⑧ 9世紀後半～10世紀前半）（S=1/1500）

Ⅱ期（④～⑥期 8世紀代）官衙関連集落期

建物数は10棟以下に減少し、中心的な建物もさほど大きくない。ただ、建物小群に伴う倉庫数が複数となり、比重が高まる。また、直列配置されたり、柱筋を揃えたりする企画的な建物配置が継続して見られ、やや官衙的な様相がうかがえる。このため公的な物資の集積・管理が行われた可能性がある。

農業生産関連遺構はため池に接続する基幹水路（Ⅳ区 SD040/060など）が埋没する一方、水田域が拡大する。

なお、土馬の足先1点が出土している（⑤期のⅣ区 SB030）。

Ⅲ期（⑦期 9世紀前半）官衙期

最大9棟の建物が左右対称を意識した「コ」字状に配置される。「コ」字形に並ぶ中心建物群には大型建物を含み、倉庫群は直列配置される。またⅡ期に続き、倉庫の占める割合が高い。このように倉庫を含む建物群がⅡ期よりも整備・拡大され、官衙的な様相が色濃い。遺物の点でも中心建物であるⅣ区 SB049で銅製帯金具が1点出土している。また、時期不詳ながらⅢ区では石帯1点、墨書土器2点が出土している。

農業生産関連遺構ではため池に伴う堤塘状遺構と水田状遺構（改修区調査区 SX01）などが存続する。

Ⅳ期（⑧期 9世紀後半～10世紀前半）官衙関連集落期

同時併存しえた建物は最大15棟程度であるが、Ⅲ期ほど整然とした配置は採らない。ただ、一部の倉庫を含む建物群は直列に配置され、ある程度の企画性が見られる。このためⅢ期に継続して公的な物資の集積・管理を担ったかもしれない（Ⅲ区では当該期に属する灰釉陶器片が10点出土しており、物質流通の一端がうかがえる。）

農業生産関連遺構ではため池に伴う堤塘状遺構と水田状遺構（改修区調査区 SX01）などが存続する。

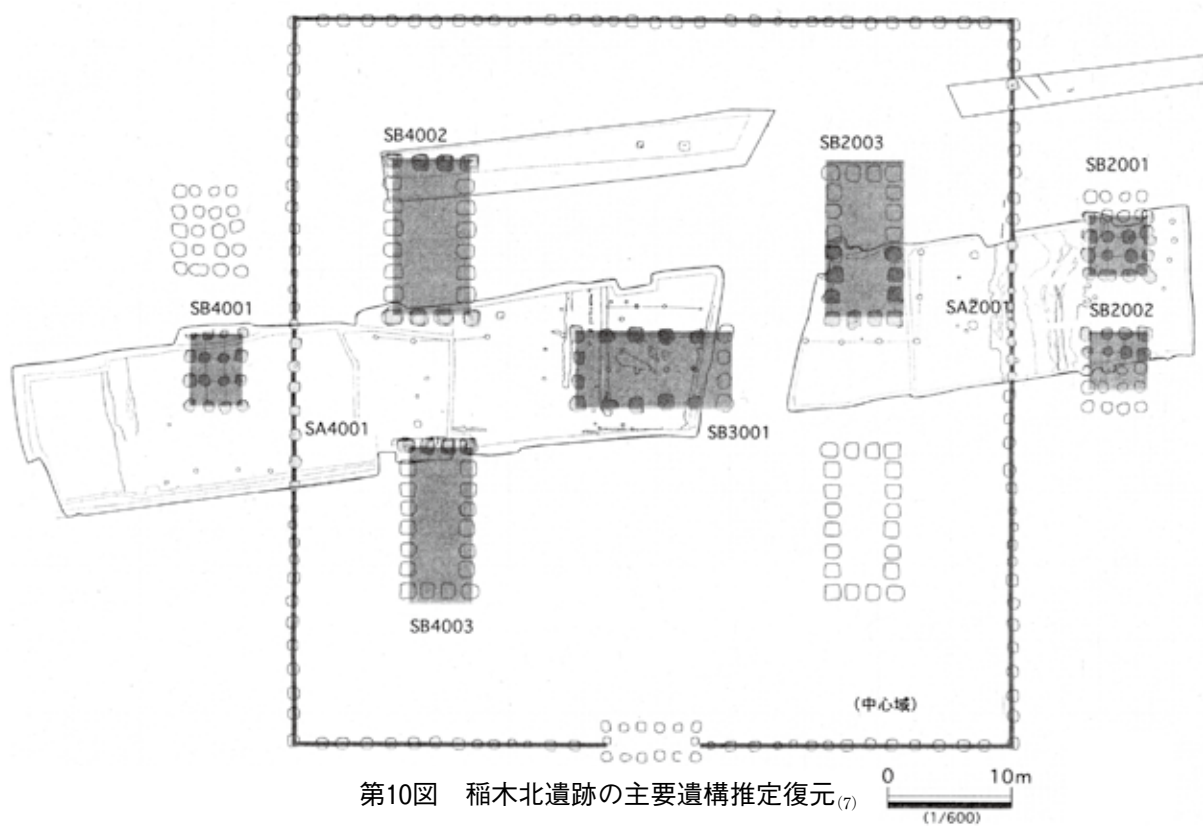
このように7世紀代の集落の形成・発展と合わせて、周辺の耕地開発や農業インフラの形成・再編成などが行われる。その後、8世紀代に集落は官衙的な様相を帯び、水田域も拡大する。そして、9世紀前半には官衙が出現する。ただ、この官衙は短期間で機能を終え、9世紀後半には再び集落に変質する。そして、10世紀代には集落も廃絶する。

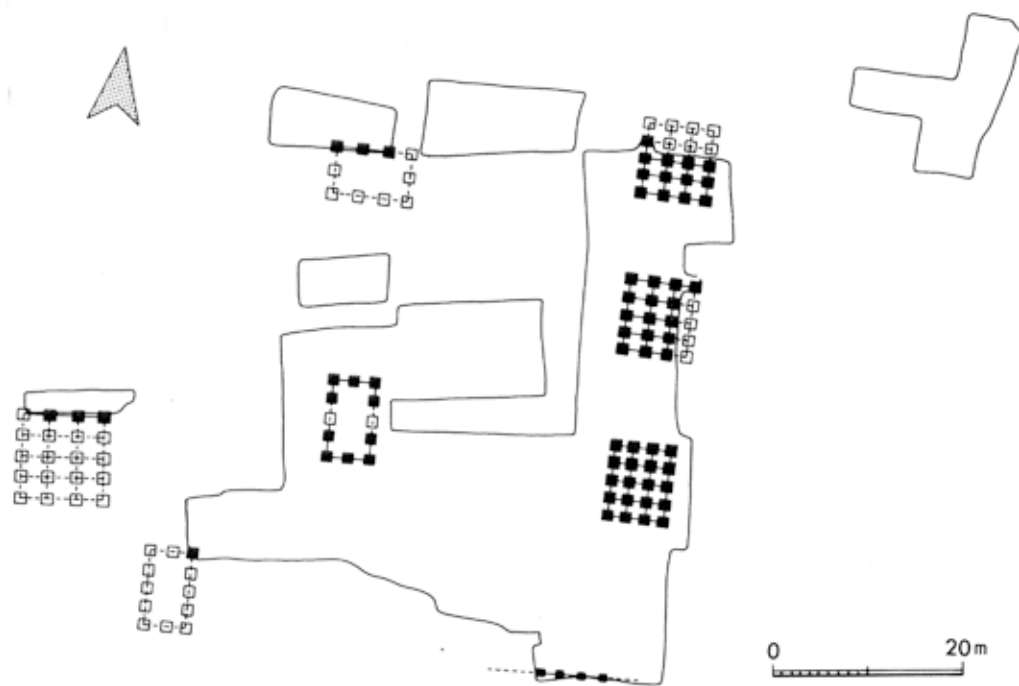
3. 9世紀前半の官衙

本節では川津一ノ又遺跡で検出された9世紀前半の官衙について、他の官衙的な遺跡事例と比較し、その性格と機能を検討する。

まず、この官衙について述べると、「コ」字形に配置された大型建物群（中心施設）に直列に並ぶ倉庫群が伴い、全体的な配置形状は「コ」字状を呈する。これらは区画施設を伴わないものの、左右対称を意識して配置される。こうした中心建物群の配置形状と左右対称性は官衙政庁でしばしば見られるため、官衙的な建物群と評価できる。

旧稿では他の官衙的な遺跡事例として、稲木北遺跡⁽⁷⁾（郡衙クラスの郡衙出先機関）、下川津遺跡（豪族居宅）⁽⁸⁾などと比較した。概要を述べると、この建物群は稲木北遺跡の建物群ほど建物配置や主軸方向に厳格な企画性が見られず、区画施設も伴わない。また、中心建物群の規模も小さい。一方で中心建物群が左右対称に並ぶ「コ」字形配置を採るという特性は下川津遺跡の建物群では見られないため、郡衙より序列が低い補完的な官衙であると考えた。こうした経緯から、本節では未検討の事例（正倉別院





第12図 島根県団原遺跡 A 期（8 世紀代）の建物群⁽⁹⁾ (S=1/800)



第13図 鳥取県戸島遺跡（7 世紀後半～8 世紀初頭）の建物群⁽¹⁰⁾ (S=1/600)

と郡衙出先機関兼郷衙)と比較する。

島根県団原遺跡⁽⁹⁾

意宇郡衙に付随する正倉別院とされる遺跡である。8世紀代には直列する正倉と推定できる倉庫群と側柱建物跡1棟が設置された。倉庫群のうち、2棟は40㎡以上を測り、川津一ノ又遺跡のそれよりかなり大型である。一方、中央に位置する側柱建物跡は倉庫群の管理棟と見られるが、その規模は川津一ノ又遺跡の中心建物群よりも小さい。また、前庭をもつ建物配置でない。このように倉庫主体の建物構成を採る点で川津一ノ又遺跡とは異なる。

鳥取県戸島遺跡⁽¹⁰⁾

気多郡衙とされる上原遺跡の東方約3.5kmに位置し、7世紀後半～8世紀初頭に存続する。隣接・後出する馬場遺跡と共に郡衙出先機関兼郷衙と評価される遺跡である。南北の二郭からなる複郭を設け、南郭では大型建物群が左右対称の「口」字形に配置される。また、建物間を堀で連結し、区画施設とする。

川津一ノ又遺跡の建物群とは実務的な機能差を反映するであろう相違点がある(複郭 建物ごとの平面形・規模が画一的 倉庫群や従属棟を伴わない 前庭が広い 区画施設を伴う、など)ものの、類似点も多い(ア. 中心建物群が左右対称の官衙的配置を採る イ. 建物位置を踏襲して建て替えされる ウ. 建物群の分布範囲や中心建物の規模が郡衙のそれよりも小さい エ. 一般的な郡衙よりも存続期間が短い、など)。

このうち、ア・イには官衙的な「口」字形の左右対称配置への執着がうかがえ、官衙遺跡であると考えられる。また、ウ・エから郡衙よりも下位に属すると見られる。

上記のとおり、前稿と合わせて様々な性格の官衙的な遺跡との対比を行った。その結果、郡衙出先機関兼郷衙とされる戸島遺跡と類似点が多い。ただ、他の郡衙出先機関とされる遺跡でもこれほど整備度が高い事例は乏しいし、郷衙は検出遺跡ごとの多様な様相が指摘され⁽¹¹⁾、実態が不明瞭な部分も大きい。

このため本節での検討をもって、川津一ノ又遺跡の9世紀前半の官衙を郡衙出先機関兼郷衙と結論付けることはできないが、本施設の性格を考える上で手がかりとなる。

4. 9世紀前半の官衙と古代の鵜足郡

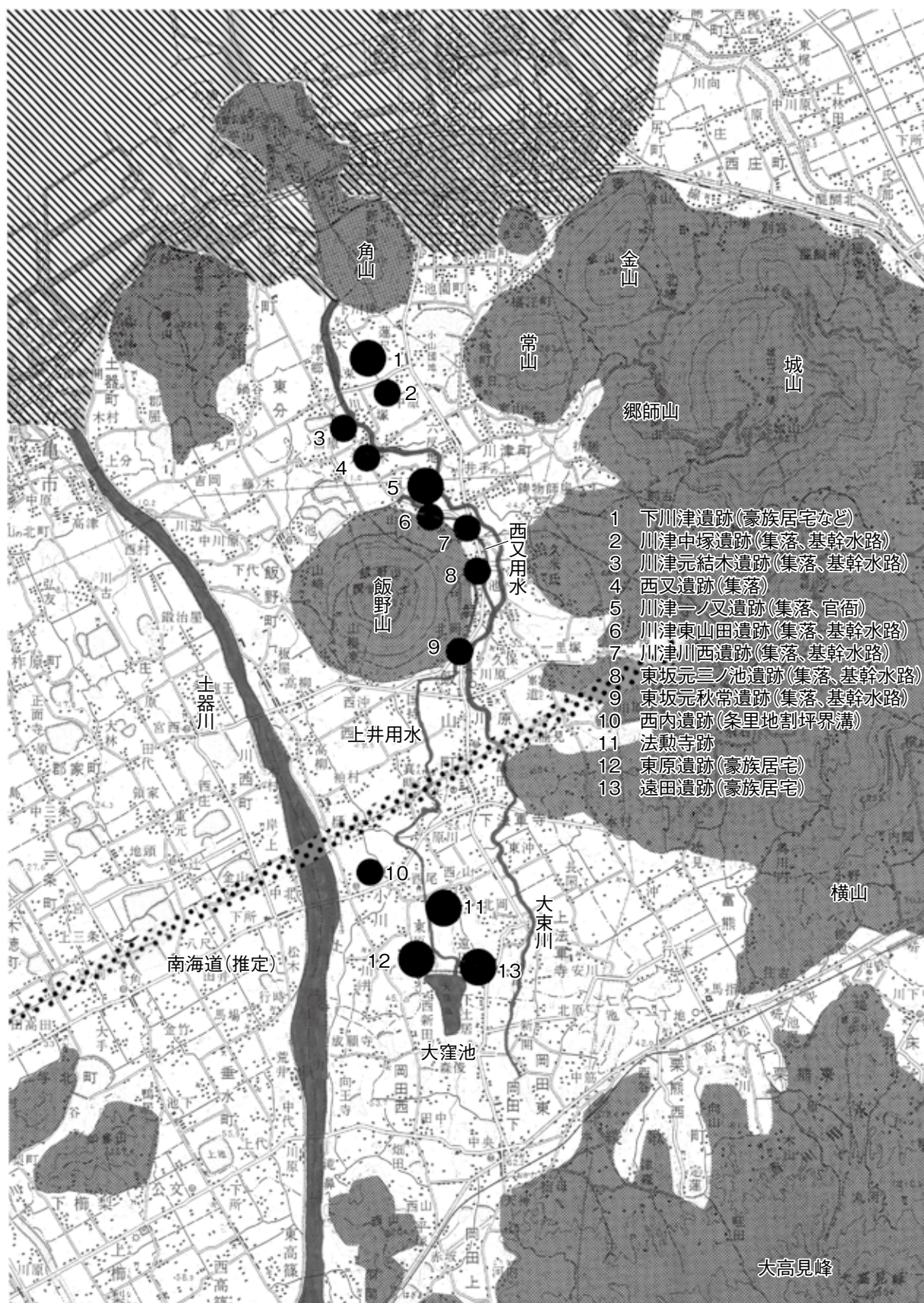
本節ではまず、古代の鵜足郡と川津郷の様相を検討し、川津一ノ又遺跡を取り巻く周辺環境を確認する。次いで、郡内での本遺跡の変遷をたどり、9世紀前半の官衙の具体的な性格や機能を考察する。

(1) 鵜足郡の古代の様相

(i) 地理的環境

古代の鵜足郡は西側で那珂郡、東側で阿野郡と接する。その郡域は東側と南側を丘陵群や山塊に画され、北側は瀬戸内海に面する。残る西側も土器川が概ね郡境に相当する(厳密には土器川の西側まで広がると考えられる)。このように郡域は自然地形により概ね区画される。

次いで郡内の地形を巨視的に見ると、北部に低地(平野・低位段丘)が広がり、南部に丘陵や山塊が密集する。この北部の低地は概ね大東川の流域に相当し、飯野山を境にさらに南北に区分される。この



第14図 川津一ノ又遺跡の周辺環境 (S=1/60,000)

ためこれらの南北2つの低地もそれぞれ四周を自然地形に囲まれている。

詳細は後述するが、郡内の低地が南北に区分され、完結的な地形であることは豪族の分布や川津一ノ又遺跡の郡内での位置づけと深く関わりと考える。よって、以下では川津一ノ又遺跡が所在する飯野山北部を「川津地区」、飯野山南部を「飯山地区」と呼称し、対比させて説明する。

(ii) 交通

[川津地区]

川津地区を経由する東西ルートは郡域東端の丘陵群により画されて限定的であり、2ルートが想定されている⁽¹²⁾。

① 常山・金山と郷師山・城山間の山道を抜けるルート

② ①ルートの途中から郷師山の南麓に沿って東へ回り、推定南海道に至るルート

どちらのルートを採用しても、川津一ノ又遺跡付近を通過することとなる。

また、水上交通については、古代の郡域の北端部に海岸線が深く湾入していたと推定されること、「角山」(津の山)、「津の郷」などの地名から、先述の下川津遺跡(豪族居宅など)付近に津の存在が示唆されている⁽¹³⁾。

[飯山地区]

飯山地区を経由する東西ルートもやはり東端の丘陵群により限定的であるが、官道である南海道が敷設されたと推定されている⁽¹⁴⁾。他には横山と大高見峰から北へ延びる丘陵群の間を経由するルートが想定できる。

また、川津・飯山の2地区を結ぶ南北ルートは地形的に飯野山の東麓、西麓を経由する2ルートが想定できるが、川津一ノ又遺跡は東麓ルートに近接する。

このように川津一ノ又遺跡は川津地区の東西ルートと郡内の南北ルートが交わる交通の要衝にあり、津とも近接する。

(iii) 主要な古代遺跡

【豪族関連遺跡】

川津一ノ又遺跡を鶴足郡内の官衙と捉える場合に注目されるのが、地域の支配者層である豪族に関連する遺跡である。

[川津地区]

豪族居宅や公的施設とされる遺跡として、先述の下川津遺跡がある。6世紀後半～12世紀代と長期に渡り存続し、7世紀中葉～8世紀代にかけては企画的な配置を採る大型建物群が見られる。また、先述した立地等を活かし、在地の物資流通や農業・手工業生産の拠点であったとされる。

本遺跡は川津一ノ又遺跡よりも先行して形成され、津を掌握した川津地区の中心的な存在であるため、両者は有機的な関係にあったと推定できる。

[飯山地区]

法勲寺は郡内で確認されている唯一の白鳳期寺院で、中世まで存続した。その創建時期から地域の有力豪族が関与したと見られる。また、豪族居宅とされる遺跡として、7世紀中葉～8世紀代の東原遺跡・遠田遺跡⁽¹⁵⁾がある。これらは谷地形を挟んで隣接し、大型建物が各1棟検出された。法勲寺跡とは地理的に近接し、創建時期が遺跡の出現期と同時期であるため、同寺の創建豪族ないし彼らと密接に関わる有力豪族が居住したとされる。

【古代集落】

川津地区で多くの発掘調査が行われており、古代に属する集落も多数確認されている。ただ、これらはいずれも短期間で廃絶する小規模な一般集落であり、官衙的な建物配置は見られない。

こうした状況を川津一ノ又遺跡のそれと対比すると、本遺跡が下川津遺跡に次ぐ川津地区の拠点であったことがうかがえる。

【農業関係インフラ】

[川津地区]

川津一ノ又遺跡で7世紀後葉までにため池とこれに接続する基幹水路が構築される。また、川津東山田遺跡・川津中塚遺跡・川津元結木遺跡などで9世紀ごろまでに大型の基幹水路が掘削される。

[飯山地区]

上記の東原遺跡・遠田遺跡に挟まれて所在する大窪池については次のような指摘がある⁽¹⁶⁾。

- ① 郡司層主導の大規模開発が7世紀中葉～8世紀代に周辺地域で進められる中で築かれた。
- ② その灌漑先は川津地区である。
- ③ このため飯野山東麓を經由し、南北へ延びる基幹水路網が整備された。

これが妥当であれば、飯山地区が川津地区の水利の一端を担ったと言え、鵜足郡内における2地区の関係を考える上で重要である。

また、条里地割に伴う坪界溝はどちらの地区でも9世紀代に掘削され⁽¹⁷⁾、この点での土地開発にさほど時期差はない。

以上の鵜足郡の様相を見ると、飯山地区は白鳳期に法勲寺が建立され、その創建豪族（や彼らと密接な関係にある有力豪族）が本拠地としていたと考えられる。また、南海道が敷設されたと推定される。さらに大窪池は8世紀代には構築され、川津地区も灌漑したとの指摘がある。このように古代の鵜足郡においては飯山地区が中核的な位置を占めていたと見られる⁽¹⁸⁾。

ただ、川津地区でも下川津遺跡で長期に渡り豪族の居宅などが営まれた。彼らは津を掌握し、独自の地位を占めていたと考えられる。そして、川津一ノ又遺跡はこれらの2地区の中央付近に位置する。この立地は2地区の関係において、川津一ノ又遺跡の機能にも影響したと考えられる。

(2) 川津一ノ又遺跡と9世紀前半の官衙

鵜足郡の上記の様相を踏まえて、川津一ノ又遺跡の7～8世紀代の状況、また9世紀前半に形成された官衙の性格と機能を述べる。

7世紀代の一般集落期に本遺跡は、川津地区の中核的な遺跡である下川津遺跡との関わりが深かったと見られる。下川津遺跡では7世紀中葉に豪族居宅が出現し、継続する。このため7世紀後葉に築かれ、川津地区を灌漑したと想定される本遺跡のため池築造やこれに接続する基幹水路の改廃には、下川津遺跡に居住した豪族が関与したと考えられる。

その後、8世紀代の官衙関連集落期に本遺跡の建物群は企画的な配置を採り、倉庫数が増加する。また、下川津遺跡でも公的施設とされる大型倉庫群（大型建物群6）⁽¹⁹⁾が8世紀中葉に出現する。このように2遺跡ではともに物資の集積活動が活発化する。また、建物群の性格に官衙的な要素がうかがえる。このことは両者の依然として強い結びつきを示すとともに、川津一ノ又遺跡の倉庫数の増加が本遺跡に



第15図 下川津遺跡 大型建物群6 遺構配置図⁽⁴⁾⁽⁸⁾ (S=1/500)

関わる物資収納だけを意図したものでないことを示唆する。なお、こうした動向には一般的に7世紀末～8世紀初頭とされる郡衙の成立⁽²⁰⁾も関係していると推測される。

そして、9世紀前半になると、本遺跡では郡衙より下位レベルの官衙が形成され、一大画期を迎える。

これに伴う倉庫群は4棟が直列配置され、前代より棟数・規模が拡大する。一方、下川津遺跡では8世紀後葉から9世紀中葉にかけて遺跡が断絶する。このように前代まで川津地区の中心的位置を占め、大型倉庫群が設置されていた遺跡が途絶える時期に、同様に倉庫群を重視した官衙が出現する状況は類似施設の（一部）移転を示すと考える。

また、この移転に際して、下川津遺跡で従来見られなかった官衙（特に左右対称の「コ」字形配置を採る中心建物群）が設置される。こうした状況は単に川津地区内だけでの動向とは考えがたく、鵜足郡衙の意向を反映したと考える。このように捉えると、本遺跡の官衙の性格は鵜足郡衙が設けた出先機関であろう。そして、設置の背景は次のように推測する。

下川津遺跡は川津地区の完結的な地勢の下、津を利用した交易や各種の生産などにおいて郡内で独自の地位を占める伝統的な豪族の居住地であった。だが、本遺跡は8世紀後葉に断絶し、その勢力も衰退した。この機会に鵜足郡衙は川津地区への影響力を強め、郡内支配を円滑化することなどを目的として、出先機関を新たに設けた。

次いで、建物配置から見たこの官衙の機能を述べる。建物群の全体形状は「ロ」字状を呈するが、「コ」

字形配置の中心建物群と直列する倉庫群からなる。建物群に囲まれた前庭は狭いため、「コ」字形配置が示す政庁的な機能を備えるものの、儀式はさほど重視されていないと見られる。むしろ整備された倉庫群や付近の従属棟の存在から物資の集積・管理などが主要な機能であると考ええる。

なお、その後9世紀後半～10世紀代には下川津遺跡で再び大型建物群が見られる。一方、川津一ノ又遺跡では官衙が廃絶し、一定の企画性をもつ建物群が少数のみ展開するのにとどまる。このため川津地区の拠点機能は再度、下川津遺跡に戻ったと考えられる。

5. まとめ

本稿では川津一ノ又遺跡で確認された古代集落とそこに出現した9世紀前半の官衙が川津郷や鶴足郡において果たした役割を論じ、①この官衙の性格と機能、②一般集落から官衙への変化の背景を検討した。

その結果、

- ① 官衙の性格は鶴足郡衙の出先機関であり、川津地区において主に物資の集積・管理などの業務を担った。また、伝統的な勢力を維持する豪族が居住する川津地区への牽制的な意味もあった。
- ② 一般集落から官衙へ変化した背景としては、8世紀代に鶴足郡衙の下で下川津遺跡が担っていた物資の集積・管理などを川津一ノ又遺跡は補佐していたが、下川津遺跡が断絶したため、9世紀前半には本遺跡がこの業務を担った、と考えた。

川津一ノ又遺跡に突如、形成された官衙を集落の変遷や地域論的な観点から分析したが、推測を重ねた部分も多い。今後の発掘調査や研究の進展を踏まえて、更に検討を加えていきたい。

- (1) Ⅲ区 山下平重『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第26冊 川津一ノ又遺跡Ⅰ』香川県教育委員会(1997)
Ⅳ区 古野徳久『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第30冊 川津一ノ又遺跡Ⅱ』香川県教育委員会(1998)
河川改修調査区 片桐孝浩『中小河川大東川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津一ノ又遺跡』香川県教育委員会(1997)
- (2) 長井博志「川津一ノ又遺跡の官衙的建物群について」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅴ』香川県埋蔵文化財センター(2009)
- (3) 県内では、床面積が40㎡を超える古代の掘立柱建物は「大型」と評価できる(4)とされる。このため本稿では、
床面積が40㎡以上： 大型建物
30㎡以上～40㎡未満： 中型建物
30㎡未満： 小型建物、と記載する
- (4) 佐藤竜馬「讃岐における官衙関連遺跡と集落動向」『律令国家における地方官衙遺構研究の現状と課題－南海道を中心に－』古代学協会四国支部(1998)
- (5) 本遺構は「堤塘状遺構」と呼称すべきであり、性格はため池の土手であるとする註(6)文献の指摘に従って、このように記載する。
- (6) 木下晴一「坂出市川津町の古代のため池跡」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅴ』香川県埋蔵文化財センター(2009)
- (7) 長井博志「稲木北遺跡」『一般国道11号(坂出丸亀バイパス)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 稲木北遺跡 永井北遺跡 小塚遺跡』香川県教育委員会(2008)

- 長井博志「稲木北遺跡と古代の多度郡」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅳ』香川県埋蔵文化財センター（2008）
- (8) 西村尋文他『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ 下川津遺跡』香川県教育委員会（1990）
- (9) 三宅博士他『史跡 出雲国山代郷正倉跡』島根県教育委員会（1981）
- (10) 吉村善雄『上光遺跡群発掘調査報告書－因幡国喜多郡推定坂本郷所在の官衙遺跡－』鳥取県気高郡気高町教育委員会（1988）
- 山中敏史「第一章第六節 郡衙の出先機関－戸島遺跡・馬場遺跡の性格をめぐって－」『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房（1994）
- (11) 井上尚明「郷家に関する一試論」『埼玉県考古学論集』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（1991）
- (12) 大久保徹也「立地と環境」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ 下川津遺跡』香川県教育委員会（1990）
- (13) 佐藤竜馬「讃岐・川津地区遺跡群の動向」『古代文化52』財団法人古代学協会（2000）
- (14) 金田章裕「条里と村落生活」『香川県史1』香川県（1986）
- (15) 塩崎誠司『団体営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 遠田遺跡 東原遺跡 上川井遺跡 前谷古墳 西内遺跡』飯山町教育委員会（2000）
- 2遺跡はどちらもごく小規模な発掘調査しか実施されていないため、建物配置などは不明である。だが、どちらも大型建物（特に遠田遺跡では3間×7間以上〔床面積48㎡以上〕の建物）が検出された。
- (16) 蔵本晋司「第Ⅴ章まとめ 第2節 古代幹線水路について」『国道438号道路改築事業（飯山工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 東坂元秋常遺跡Ⅰ』香川県教育委員会（2008）
- なお、この際に整備された大窪池から川津地区に至る灌漑水路は現在の上井用水・西又用水に機能が継続されることが指摘されている。
- (17) 川津地区では川津一ノ又遺跡・下川津遺跡で、飯山地区では西内遺跡で9世紀代に条里坪界溝が掘削される。
- (18) 9世紀代には飯山地区の東原遺跡・遠田遺跡で豪族居宅が廃絶する。ただ、「(1) 鵜足郡の古代の様相」で述べた諸要素より、本地区が鵜足郡の中核を担う状況は変化していないと考える。
- (19) 「大型建物群○」という呼称は下記文献による。
- 佐藤竜馬「讃岐における官衙関連遺跡と集落動向」『律令国家における地方官衙遺構研究の現状と課題－南海道を中心に－』古代学協会四国支部（1998）
- (20) 山中敏史「第3章第3節 国衙・郡衙の成立と変遷」『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房（1994）